

meet again
もういちど北大と出会う

その二

研究スタイルを地域差に追い求めて



岡田 成幸
工学研究院

かつて大通には官舎があった。私はそこで生まれた。その後今の北区に転居し幼稚園と小学校時代を過ごし、中学校から大学までを東区で暮らし、そのまま北大の助手となり北区への転居を繰り返したものの現在は東区で暮らす。生粋の札幌生まれ、札幌育ちである。

そんな私が、六年前、北大を辞し、単身で名古屋工業大学へ赴任した。それというのも、恩師の一言がいつも気になっていたからである。「一度は研究環境を変えなきゃダメだ。」

一九八〇年代、外国人に日本の特徴を尋ねたら「homogeneous（画的）」と答えが返ってきた時代である。今日ほど格差を意識している人はいなかった。大学も「期校・二期校」の時代である。共通一次やセンター試験を私は知らない。今ほど大学の序列化が進んではいなかったのである。どこで研究をしようとか何が大きく違うのだろうか、恩師の言葉は喉に刺さった小骨のような存在でありながらも、その意図するところをつかみかねていた。言い忘れたが、私の専門は地震防災計画である。当時、実は今も基本はそうなのであるが、日本の地震防災は災害対策基本法を軸に、日本全国同じ対策を布いている。対策も「homogeneous」なのである。ならば、防災フェイルドはどこであろうと防災理論に変わりはない・・・はずであった。

一九九〇年代に入りそれまで沈静化していた日本の地震が活動期に入り、特に九〇年代前半は北海道に被害が集中した。調査をしていて、中央の研究者の指摘が地域被害と微妙にずれていることを感じ始めた。大方の発言は最大公約的な教科書どおりの被害形態に議論が集中してしまうのである。被害の特殊解は北海道の特殊性として切り捨てられてしまう。地元の人々の被災体験は防災の基本理論の確認には利用されたが、被災地への新たな防災の一手に研ぎ澄ましてはくれないのだ。それでは地域住民は救われない。災害は地域性（特殊性）にこそその本質があることを強く意識し始めたのはこの頃である。

時代は巡りその機会はいきなりやってきた。「希望格差社会（山田昌弘）」、「封印される不平等（橋本俊詔編）」、「大学「法人化」以後、競争激化と格差の拡大」（中井浩一）、「ミレニアムの頃購入した、私の書棚に今も残る本である。二〇〇〇年代に入り、格差が社会のキーワードにのし上がり、大学にまで格差の冠がつく時代を象徴している。グローバル化が格差を生み、その格差の無視が病原であることに世の中が騒ぎ始めたのである。その時である。「縮小文明（月尾嘉男）」と言われる日本にあって、一番元気の東海圏からのお声かけであった。教育・研究に加え、アウ

トリーチ（社会活動）に力を入れ始めた東海圏に学びの場を求め、恩師の言葉を遅ればせながら体現できた。北海道は通過人口の土地柄であるのに対し、名古屋は思った以上に滞留度が高く、独特の地域文化が醸成されやすい土地柄である。紙幅の関係からディテールを記述する余裕はないが、この六年間で防災研究を絡めた様々なスタイルを地域に学び、人に学び、文化に学んだと思っている。グローバル化が強力で叫ばれている今日ではあるが、一方で「差」を置き去りにしてはいけないと思っている。地域に研究基盤を追い求める姿勢も忘れてはならない。

写真は他界した父がとってくれたもの。写真好きの父のおかげで、アルバムが多く残っている。弟と北大工学部をバックにした四歳の時の写真である。当時、白聖館と呼ばれていた白タイルを張った美しい建物である。時代を感じる写真ではあるが、今の日本、このように特徴ある風景も少しずつなくなっていく。

（おかしげゆき）



北大工学部前庭で（1957年）